

---

ニールク

# 久手堅 屋号二六の戦争体験

---

2022年6月2日

南城市教育委員会文化課



沖縄戦の時、久手堅に住んでいた  
屋号「二六」の人々の戦争体験を紹介します





知念中学校

格安BBQレンタル  
BBQOceans  
バーベキュー

知念こども園

知念小学校

★ 屋号「二六」

久手堅駐在所

知念図書館

久手堅根人

久手堅公民館

86

# 沖縄戦とは

---

1937(昭和12)年 日中戦争

1941(昭和16)年 アジア・太平洋戦争

1945(昭和20)年 3月末～6月末頃 沖縄で激しい地上戦（沖縄戦）

アメリカ軍：日本本土を攻めるための基地を沖縄につくる目的

日本軍： アメリカ軍による本土進攻を遅らせるための時間かせぎ

# 沖縄の人々も戦争に参加させられた

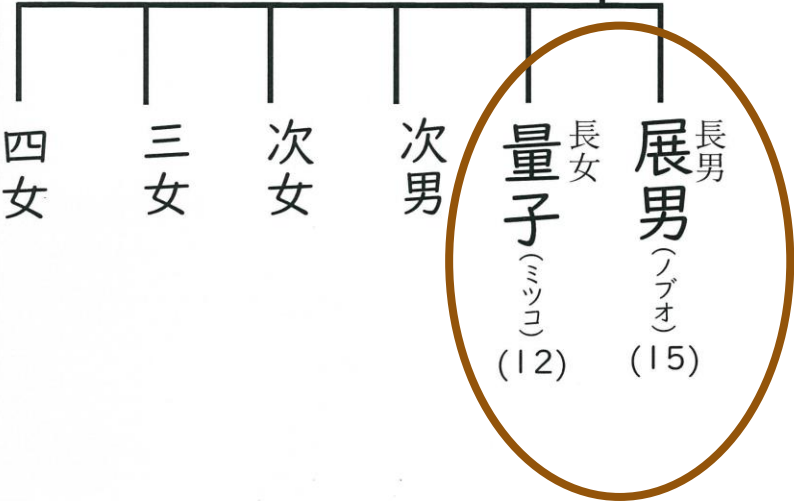
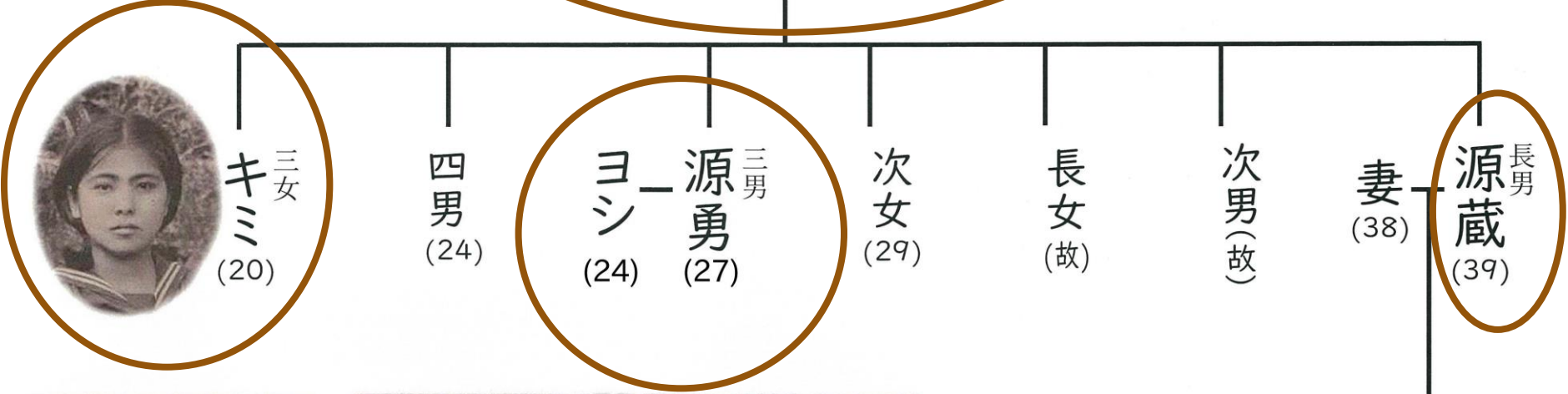
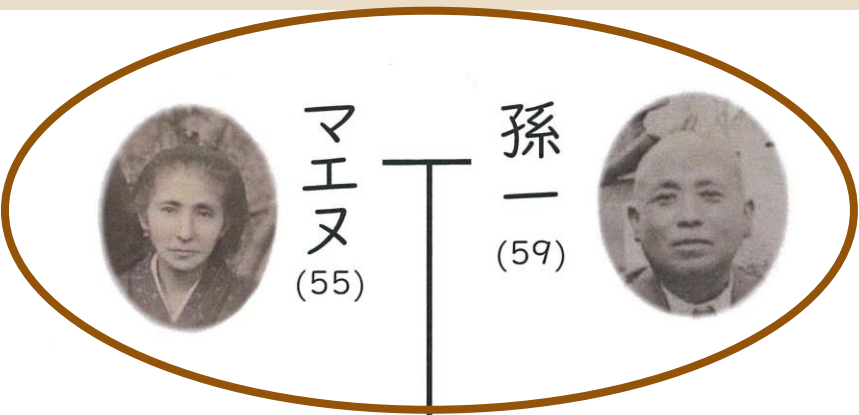
「<sup>げんちじかつ</sup>現地自活に<sup>てっ</sup>徹し、<sup>いちぼくいっそう</sup>一木一草といえどもこれを戦力化すべし」

沖縄戦で戦った日本兵約11万人のうち、2万数千人は「<sup>ぼうえいたい</sup>防衛隊」や  
「<sup>がくとたい</sup>学徒隊」などの沖縄住民だった。

それに対し、アメリカ兵の数は約54万人だった。（そのうち18万3000人が沖縄に上陸）

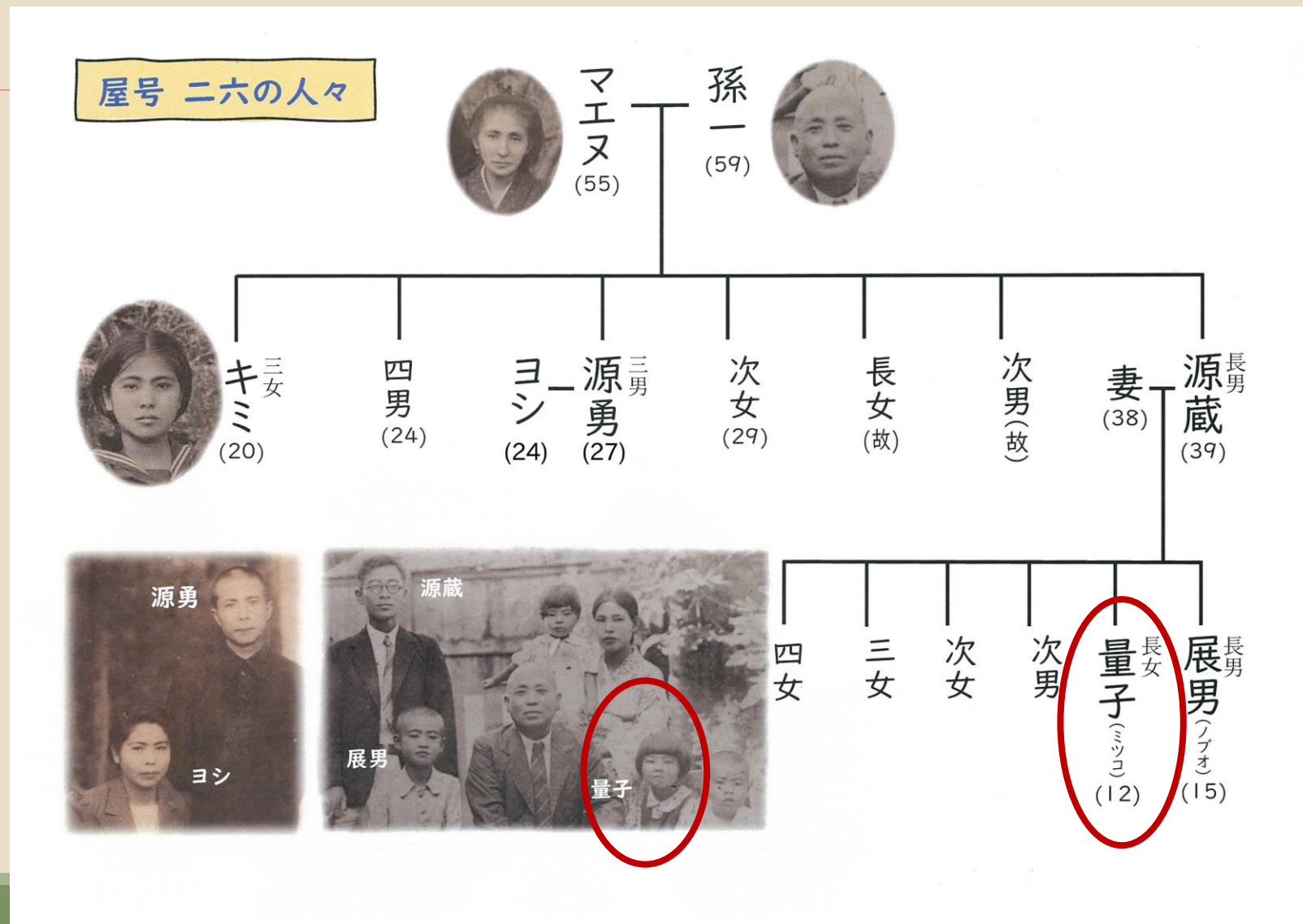
アメリカ軍が沖縄に上陸してからも、日本軍の<sup>たまはこ</sup>弾運びや<sup>うんぱん</sup>食料運搬などに  
住民が動員された

屋号 二六の人々



1944(昭和19)年  
8月

ミツコ  
量子が  
そかい  
宮崎へ疎開



# 1944(昭和19)年8月 <sup>ミツコ</sup>量子が<sup>そかい</sup>宮崎へ疎開

- 1944年7月、サイパンで日本軍が負ける  
→ 次は沖縄が戦場になることが予想される  
→ 沖縄県外や台湾への疎開が始まる

疎開 = 戦場で足手まといとなる高齢者や病人、  
子ども、女性などを別の場所へ移動させること

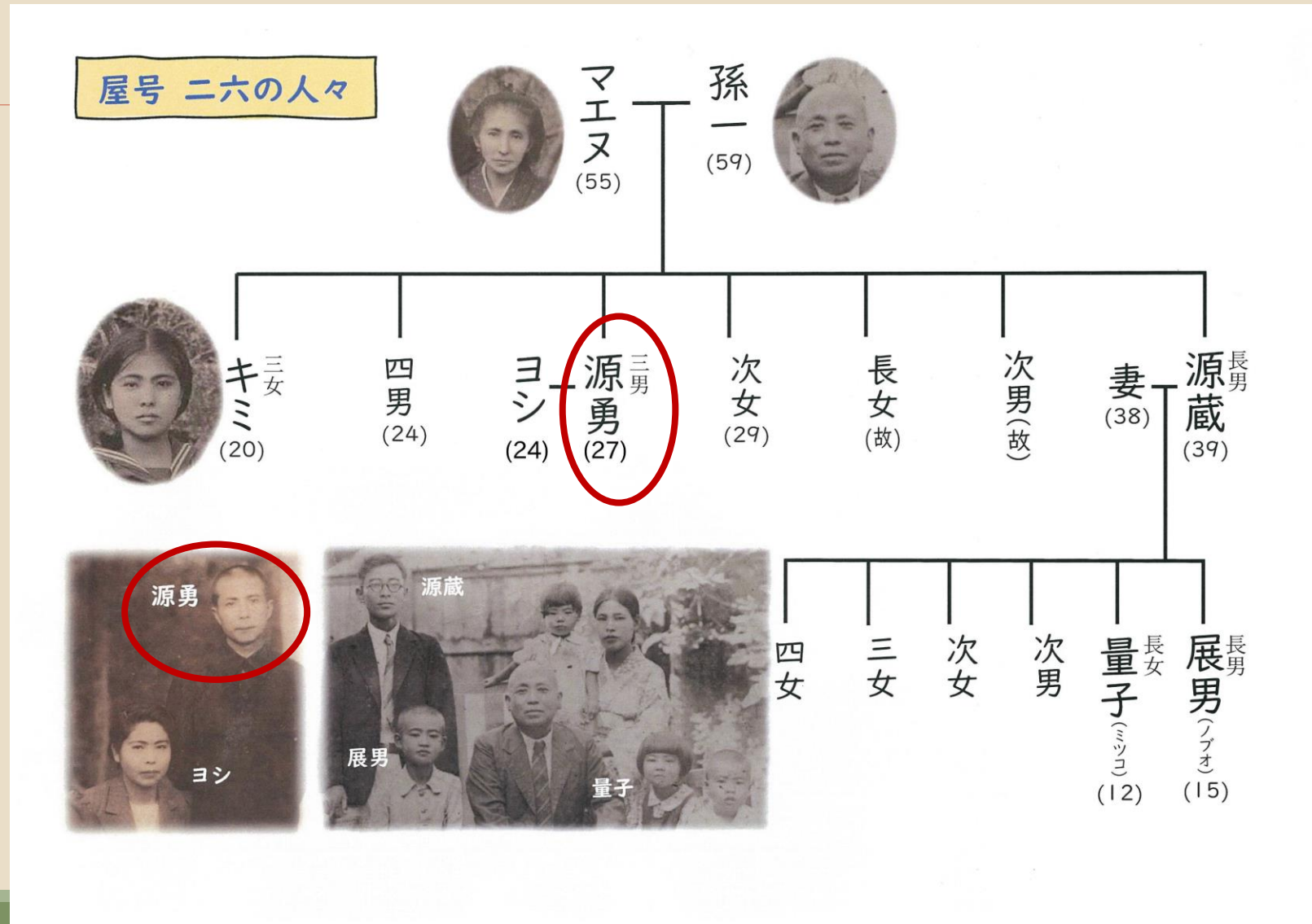
<sup>つしままる</sup>疎開船「対馬丸」がアメリカ軍の攻撃により沈没

- 知念では学童疎開が行われなかった



1945(昭和20)年  
3月初め

源勇が  
防衛隊に動員



# 1945(昭和20)年3月初め ぼうえいたい 源勇が防衛隊に動員

## 防衛隊

日本兵として戦争に参加していない17~45歳の男性が集められ、日本軍のさまざまな部隊に配属された。

なかには軍隊の訓練を受けたことがない人や、武器を持たないまま戦いに参加させられた人もいた。

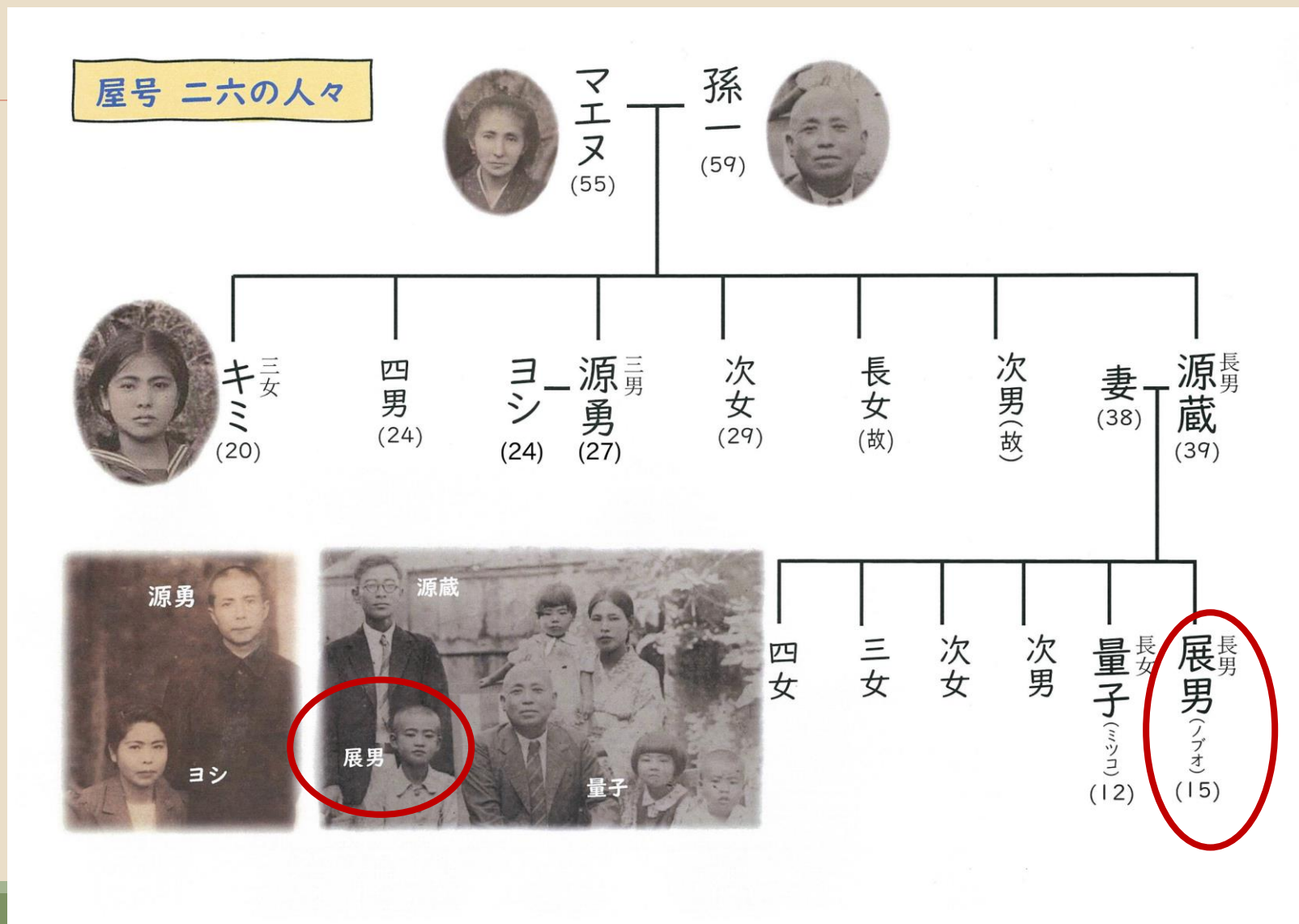
## 知念村の防衛隊員

独立混成第15連隊（玉城村に駐屯）：238人

海上挺進基地第28大隊（具志頭村港川に駐屯）：195人

1945(昭和20)年  
3月下旬

ノブオ  
展男が  
学徒隊に動員



# 1945 (昭和20)年3月下旬 <sup>ノブオ</sup> 展男が <sup>がくとたい</sup> 学徒隊に動員

## 学徒隊

<sup>しはん</sup>  
日本軍は、当時の中学校や師範学校（教師を育てるための学校）、  
高等女学校で学んでいた14～19歳の若者たちも、「学徒隊」として  
戦場にかりたてた



てっけつきんのうたい  
男子は「鉄血勤皇隊」と「通信隊」

うんぱん      じんちこうちく

鉄血勤皇隊：軍の物資運搬や陣地構築など

ばくげき

しゅうふく

通信隊：爆撃で切断された電話線の修復、

でんぱう

電報の配達など



動員されてしばらくは壕掘り作業が続いた

陣地構築



女子は軍の病院で看護活動

(ひめゆり学徒隊・白梅学徒隊など)

国のために何一つ尽くさずに長生きするより、  
国のためなら今死んでも本望です。  
通信隊へ志願させてください。



展男



源蔵

無線だから最後まで生き残るだろう

と許可。

(涙を流す母に対し)

おかあさん、僕が死んでも正次（弟）がいます、  
何も悲しまないてください。

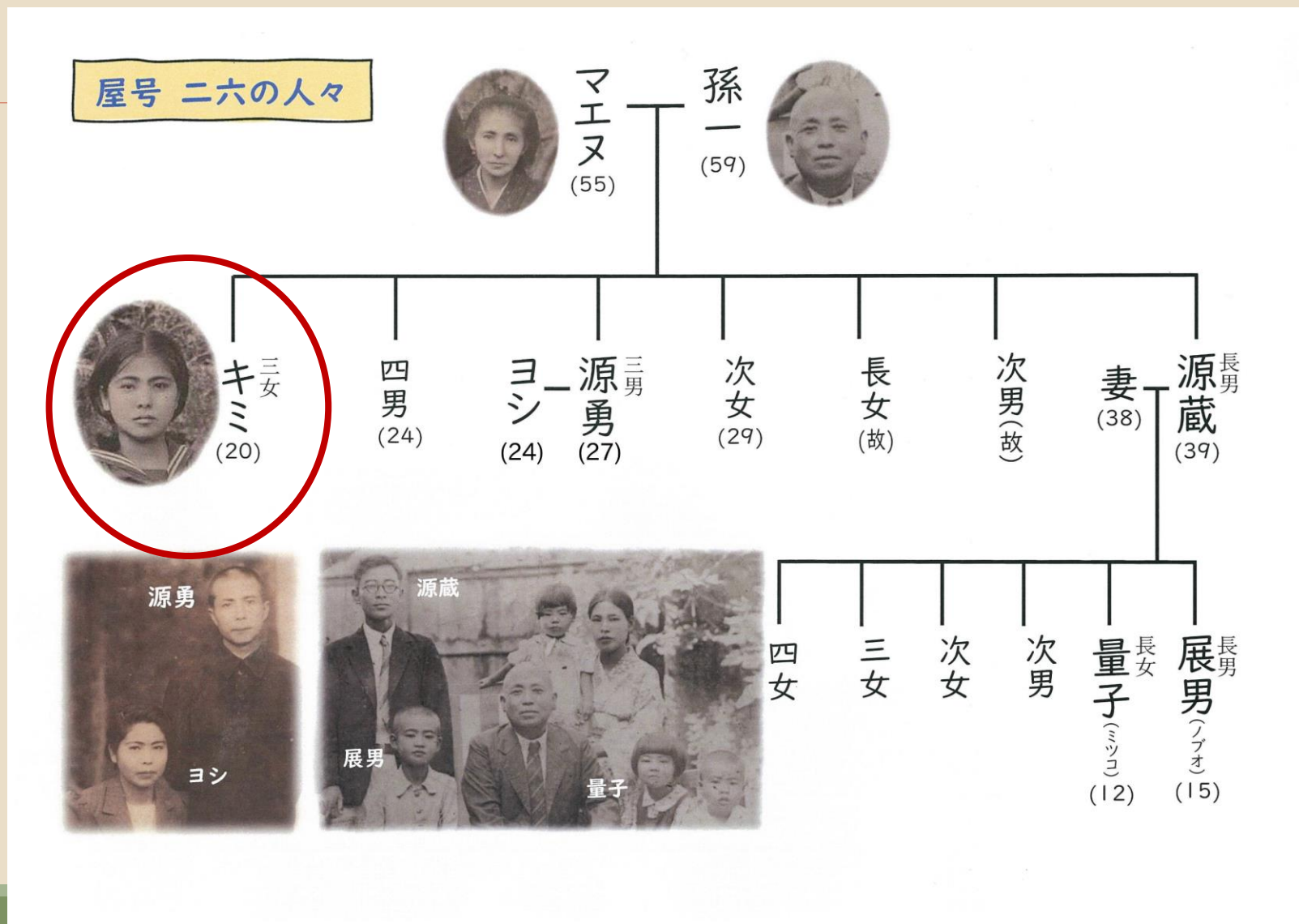
と、心からうれしそうに家を出て行った。



展男

1945(昭和20)年  
3月下旬

キミが  
救護班に動員



補助看護婦。徴用及行軍部  
 知念國民学校に駐屯する独立第十五連隊第二大隊長井上  
 大尉は当時女子青年団、幹部及國民学校の女教員に急  
 徴法の講習會を大隊付軍医及衛生下士官と共に昭和二十年  
 二月中旬より十日間学校に招集して度講せしめ若し敵  
 が上陸した時は補助看護婦として採用するから疎開等  
 はしてはいけなしかたに注意せられて講習を終了した

昭和二十年三月三日  
 又直ちに大隊本部に召集し全負傷者勤務を命じた。連  
 日連夜の攻撃に負傷兵が脱出し其の度に大隊本部医務  
 室迄運んでこられればならず其の間出血等し輸送途中  
 死に至る者もあり犠牲者最少限度にとらめざるべく各中

隊に補助看護婦を派遣した  
 四月二十七日那覇方面の前線への進出と同時に興和志村安里  
 の坑道に假包帯所を設置し前線より護送せられる負傷兵  
 の治療に従事していったが五月十三日頃より泊・安里方面に  
 突入した敵も数回にわたる奪取戦のため兵員に負傷兵が  
 脱出し徴用兵により後方への患者輸送を実施した。尙に合  
 はず残った負傷兵も最後の一人迄後方へ輸送すべく努力  
 した。力及ぶ中遂に敵の馬來り攻撃により負傷兵も其  
 のに堪えざる戦死を遂げた

以上調書は在存者の供述による

一九五五年 月 日

# 1945 (昭和20)年3月 きゅうごはん キミが救護班に動員

---

日本軍は足りない人員をおぎなうため、防衛隊や学徒隊に参加して  
いない男女も、日本軍の炊事班すいじはんや救護班きゅうごはん、義勇隊ぎゆうたいとして集めた

キミは、知念村に駐屯していた独立混成第15連隊第2大隊（井上大隊）  
の救護班に配属される

1945(昭和20)年  
4月1日

## アメリカ軍が 沖縄島に上陸

沖縄島の各地で日本軍と  
アメリカ軍による  
はげしい戦闘が始まる



RG, Series Item: 127-GW-619-116424

沖縄県公文書館

# 5月 救護班のキミの戦死

キミは部隊とともに、佐敷のフナクブ<sup>ごう</sup>壕、壺屋<sup>つぼや</sup>（現 那覇市）の壕、  
安里八幡宮横<sup>あさとちまんぐう</sup>の壕（現 那覇市）へ移動。

5月下旬ごろ、安里八幡宮横の壕が  
アメリカ軍の馬乗り攻撃を受け、  
キミも戦死。



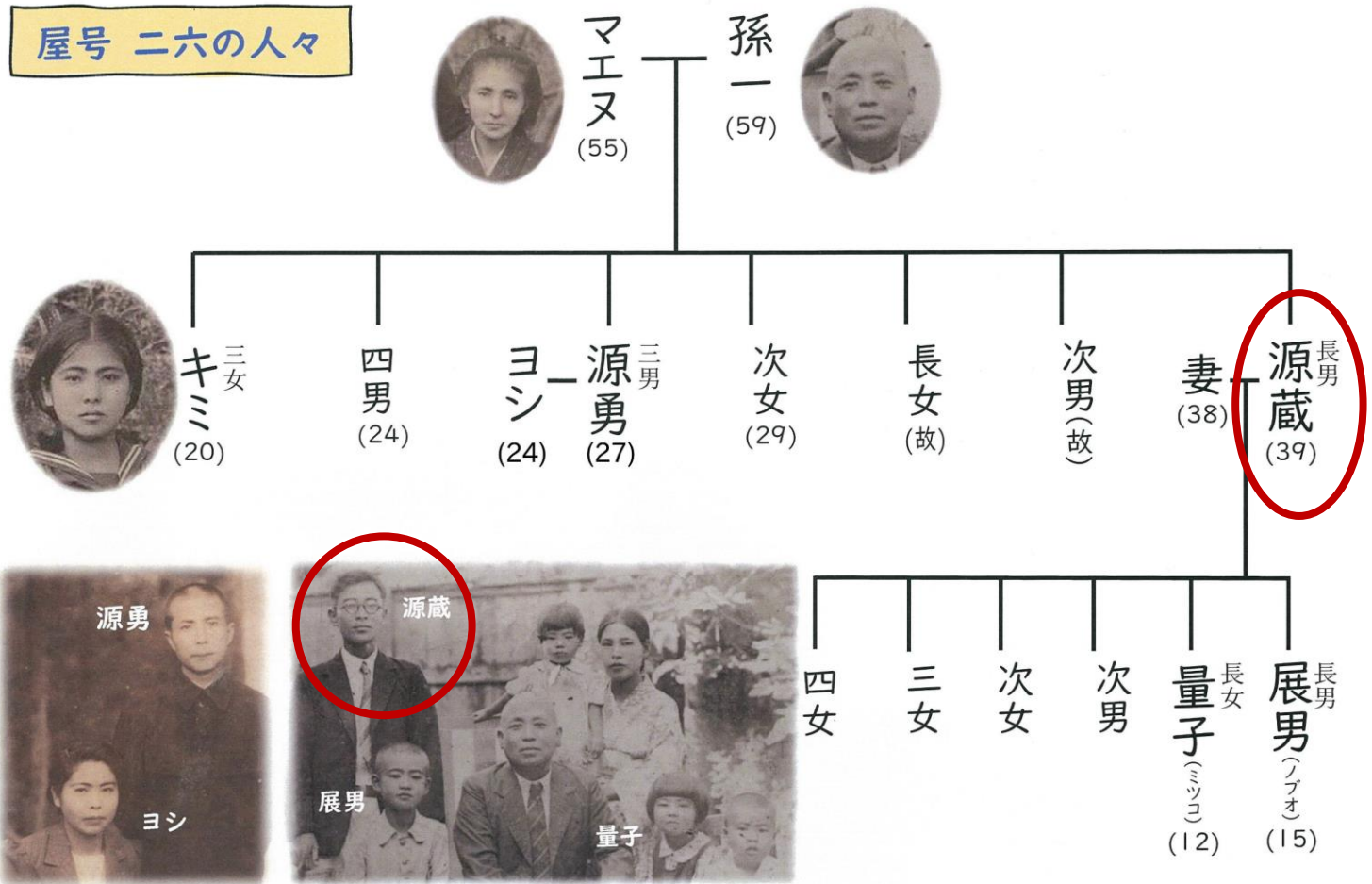
沖縄戦でのアメリカ軍による日本軍陣地への馬乗り攻撃（時事ドットコムより）

終戦後、キミの遺骨を探しに行った源勇（兄）の回想

（壕の）入口から五メートル位入ると脚を折り曲げ軍服に包まれたミイラになっている黒い遺体が数十人とおもわれる、黒焦げである。入口に女の下着らしいものも落ちていた。臭気が強く奥に入ることはできなかった。遺骨は持ち帰ることはできなかった。

5月

げんぞう  
源蔵の戦死



# 5月 源蔵の戦死

源蔵一家は、妻の実家がある豊見城村渡橋名（現 豊見城市）<sup>とはしな</sup>へ避難

→ 5月末、源蔵が渡橋名の壕から軍の食料運びにかり出される。

→ 運搬中<sup>うんぱん</sup>の高嶺村字大里（現 糸満市）で、砲弾<sup>ほうだん</sup>の破片<sup>はへん</sup>が胸に命中して即死。

近くのイモ畑に遺体を埋めたが、戦後そこが大きな道路になってしまったため、遺骨は見つからなかった。



爆弾の破片（西日本新聞ホームページより）

## 6月 学徒隊員の展男の戦死

首里→津嘉山（現 南風原町）→  
喜屋武村福地（現 糸満市）まで  
たどり着くが、福地あたりの壕を  
さまよい歩いて、山城（現 糸満市）  
付近で自決か、戦車砲で撃たれた  
ものと思われる。

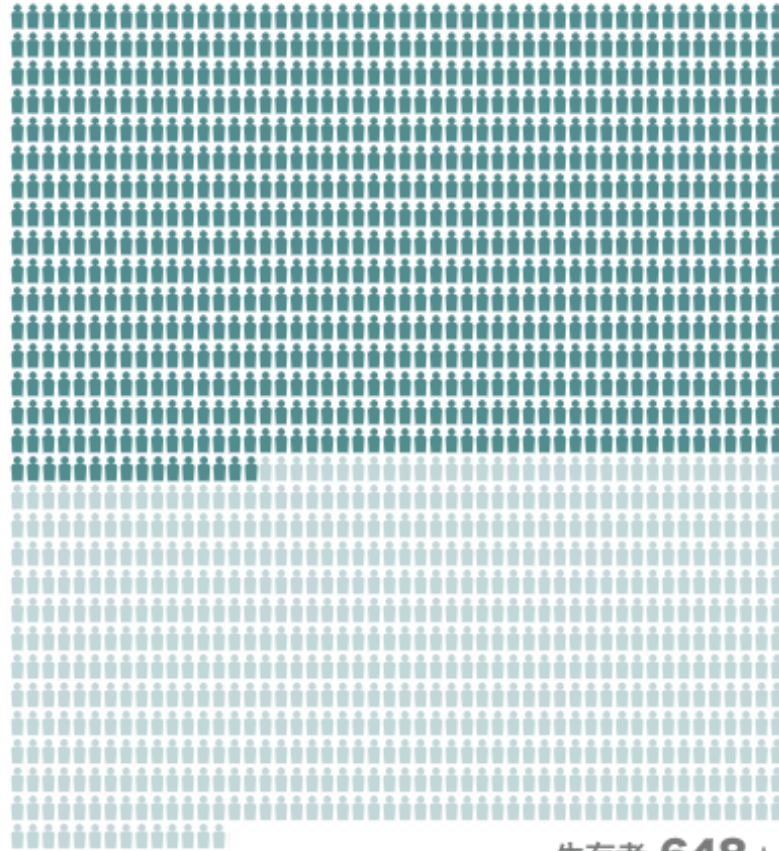
戦死場所不明、遺骨なし。



# 学徒の動員数と戦死者数

## 男子学徒隊

動員数 **1,464**人  
戦死者数 **816**人



生存者 **648**人

## 女子学徒隊

動員数 約**505**人  
戦死者数 **202**人



生存者 **303**人

出典:「沖縄戦の全学徒隊」(ひめゆり平和祈念資料館)

ぼうえいたい

# 防衛隊の源勇の経験

はいぞく

かいじょうていしんきち

源勇が配属された海上挺進基地第28大隊は、

とっこうてい

かいじょうとっこう

特攻艇㊦で海上特攻をする部隊

→ 防衛隊員の任務は、㊦を壕の中から出し、海に浮かべることだった。

源勇は指揮班にわり当てられ、  
村役場との連絡係をつとめる。

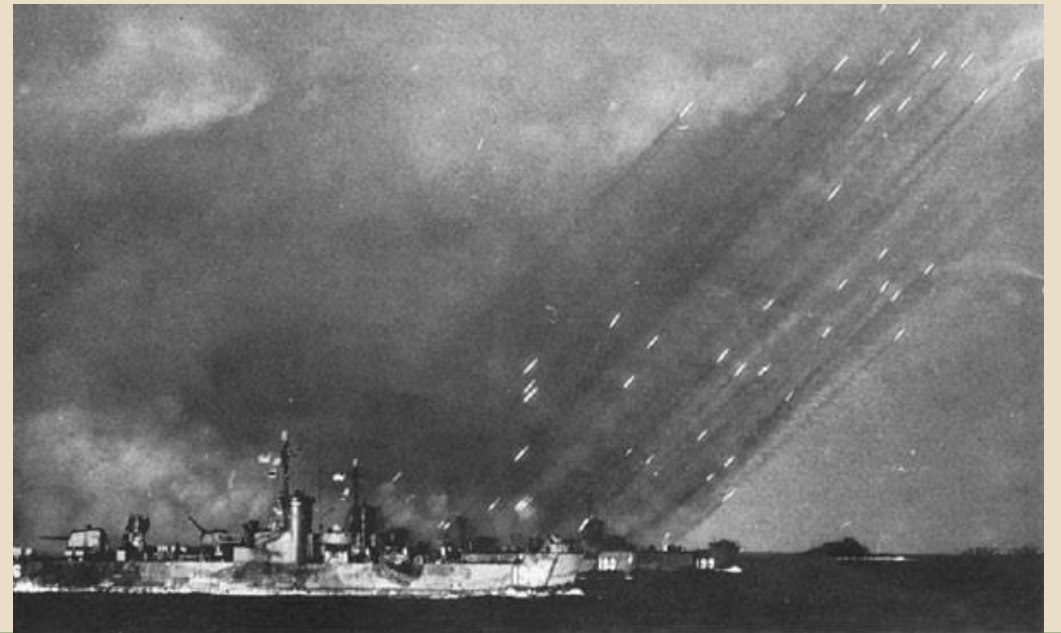


台湾で撮影された旧陸軍の水上特攻艇「マルレ」＝  
「マルレの戦史」から  
(朝日新聞ホームページより)

# 防衛隊の源勇の経験

アメリカ軍の攻撃が始まると、部隊は配属先の志堅原から、糸数のアブチラガマ、大城城跡の下（以上、現 南城市）、豊見城村高安（現 豊見城市）へ移動。

→ 4月26日頃、カンポウで頭を負傷。



艦砲射撃（時事ドットコムより）

5月27日頃、防衛隊の  
渡嘉敷（現 豊見城市）の壕を  
出て、玉城村垣花  
（現 南城市）の壕に行き、  
妻（ヨシ）と合流。

源勇とヨシは、久手堅に  
いる源勇の父母（孫一・  
マエヌ）の元へ向かう



孫一とマエヌは、久手堅の自宅内の壕で数日過ごしたのち、佐敷村と知念村の間にあったイリジョーガマに移動

→ 5月下旬に自宅に戻る

→ 源勇・ヨシが合流



## 6月上旬、アメリカ兵が久手堅に入ってくる

---

- 源勇たちは、せーふあうたき 齋場御嶽のテラヤマや海岸、墓の中などへ数日間避難するが、ほりよ 捕虜になることを決め、久手堅の役場前が出る
- アメリカ兵の指示をうけてしゅうようじょ 佐敷村屋比久(現 南城市)の収容所へ行き、数日間過ごす

# 収容所となった知念半島

収容所 = 戦場から離れた場所で、住民や捕虜（ほりよ 軍人・軍属）が  
集められた場所

沖縄戦後半の1945年6月上旬から中旬にかけて、現在の糸満市摩文仁  
まぶに  
周辺では、日本軍とアメリカ軍による戦いが激しさを増し、住民の  
犠牲も激増

いっぽうで、知念半島は非戦闘地域ひせんとうに指定され、収容所しゅうようじょが各地に  
設置された



# 収容所となった久手堅

6月の初めに捕虜となった  
孫一、マエヌ、源勇、ヨシの  
4人は、佐敷村屋比久の収容  
所で数日過ごしたのち、久手  
堅の自宅に帰ってくる

→自宅はすでに収容所になっ  
ていて、家には30人ほどの  
避難民がいた。



---

ひなんみん

孫一たちは焼け残った離れに、親せきの女性と避難民の男性2人とともに計7人で入ることになった。

はいきゅう

6月下旬、孫一が久手堅の区長となり、離れは避難民に食料を配給する事務所倉庫ともなった。

# 日本兵の襲撃

7月19日の夜中、せーふあうたき 斎場御嶽近くの岩の上に隠れていた日本兵7～8人が、「（お前たちは）捕虜になって、それでも日本国民か」と、孫一たちが住んでいた離れを襲う

→ 源勇・ヨシ夫婦と親戚の女性が銃で撃たれる

離れの外に逃げ出した孫一も手りゅう弾を投げつけられるが、幸いすり傷で済んだ。

夜明け前、日本兵たちは倉庫から食料の袋をかつぎ出して引き上げる。

ごや

源勇とヨシは胡屋(現 沖縄市)の米陸軍  
病院に入院、骨折の治療を受けた。

親せきの女性は宜野座の病院に  
運ばれて亡くなった。



屋号 二六の人々

村内避難



マエヌ (55)



孫一 (59)

